

# 西田哲学会会報

第六号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会事務局

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

## 西田哲学会第六回年次大会・報告



プレカンファレンス 外国語セッション  
「西田哲学と新儒教」

第六回目となる今回の年次大会は、二〇〇八年七月二十六日と二十七日の二日間、石川県かほく市にある西田幾多郎記念哲学館で開催されました。多くの会員にとって遠路であり、交通も不便でありながら、二日間で延べ一八〇名にご参加いただきました。

一日目の午前には、例年通りプレカンファレンスが行われました。今回は初めて「外国語セッション」が実施され、「西田哲学と新儒教」と題して、ロバート・ワゴ氏の司会により次の三つの発表がなされました(使用言語は英語でした)。張政遠氏(香港)「西田幾多郎の哲学における共感の本質」、黄文宏氏(台湾)「西田幾多郎の宗教的世界の論理—現代新儒家の宗教観との比較—」、林永強氏「理性」における歴史…西田幾多郎と牟宗三」。その他、別会場にて浅見洋氏と森哲郎氏によって講読部門「『善の研究』勉強会」が、秋富克哉氏とわたくし(大熊)により自由茶話会「哲学サロン」が行われました。

同日の午後は、次の二つの講演が行われました。井上克人氏による「時と鏡—西田哲学に於ける実在の論理」と野家啓一氏による「科学哲学者としての西田幾多郎」です。ともに非常に興味深い講演で、時間ぎりぎりまで多くの質疑応答がなされました。

二日目の午前には、次の三つの研究発表が行われました。城阪真治氏「場所の論理と基体概念」、浅倉祐一朗氏「西田哲学における芸術—K・フィードラーを中心に—」、ミシェル・ダリシエ氏「西田哲学についての論述の試み」。やはり多くの質疑があり、有意義な討議が数多くなされました。午後には小林信之氏の司会によりシンポジウムが行われました。提題者および各提題は次の通りです。香西克彦氏「西田哲学と建築(論)」、米山優氏「哲学が持ちうる芸術美とはどんなものか?」、大熊治生「『芸術と道徳』における西田幾多郎の美学思想」。シンポジウムの内容については、別項をご覧ください。(文責・大熊玄)

### シンポジウム報告

#### 哲学と芸術 小林信之

二〇〇八年七月二十七日、西田哲学会二日目に恒例となったシンポジウムが、本年は「哲学と芸術」をテーマとしておこな

われた。このテーマをめぐる、大熊治生(千葉科学大学)、米山優(名古屋大学)、香西克彦(財団法人啓明社)のパネリスト三氏によって提題がなされ、それをうけて充実した議論がくりひろげられた。三時間半におよぶ内容の詳細は到底ここで紹介しきれぬものではないが、遺漏なきことを祈りつつ、大きな論点のみ集約するかたちでお伝えしておきたい。

西田哲学において芸術の問題は、その重要性がさまざまに指摘されながら、ときに焦点のしぼりにくいものであった。そのためシンポジウムをはじめにあたって司会の側から、議論全体をみちびく着眼点としてふたつの事柄があらかじめ提示された。(一)まず西田哲学全体のなかで「芸術」がどのような位置を占めるのかという点である。芸術に関する西田の思索は、宗教や倫理と同じ次元で、かれの思想そのものに不可欠な一環をなすのだろうか、それとも単なるエピソッドにすぎないのだろうか。(二)つぎに、芸術なる

営為を、ポイエーシスという意味での(より広義の)制作活動、さらには人間の文化形成の営みそのものとみなすならば、テクノロジーに規定された現代の文化状況に対して西田哲学はなお意味をもちうるのか、もちうると思えば、それはどのような意味においてか、という点である。西田哲学そのものをどう解釈するかという内在的問題と、現代における西田の思想的意味という二点であるが、このふたつの問いはけっして無関係ではなく、ポイエーシスとしての(広義の)芸術の問題へと収斂していくと考えられる。このように司会の側から提示されたシンポジウム全体の問題設定に対して、三氏はそれぞれきわめて意味深い言葉を投げ返してくれたように思われる。シンポジウムの場での発表の順序とは前後するが、以下にその要旨をたどっておきたい。

大熊治生氏は、前期の西田哲学における芸術論を、とくに『芸術と道徳』等の著作を中心に取りまとめ、解釈をくわえた。『善の研究』や『自覚における直観と反省』に結実した前期西田の思想は、フィヒテや新カント派の問題圏、つまり意識ないし自覚の立場に属しており、そこからいかに自立して自己の哲学的拠点を築くことができるか、悪

戦苦闘していた段階にあったといえよう。この時期において「芸術」の問題はどのように西田に出会われ、かれの哲学思想内部で規定されたのか、そしてその問題意識は中後期にどのように受けつがれたのか、大熊氏が丁寧にたどっていったのはこうしたテーマである。大熊氏はとくに、この段階の西田がすでに美的感情を、芸術創造における能動的意志ないし生命性の運動としてとらえていることを指摘している。たとえば新カント派のH・コーエンが、カントの「知覚の予料 (Antizipation)」の原理をもって感覚世界の客観性を学的に基礎づけようとしたことを受けて西田は、さらにそれが「感情」の段階において「意志の予料」の原理に当てはまり、自由な文化現象の世界が基礎づけられると考えた。つまりこの時期の西田は、いわゆる「実在」の根底に意志を見、そうした行為的立場の具体性から、芸術の「材料」たるべき感情をとらえようとしたわけである。大熊氏は、このような行為的立場からの芸術(ないしは芸道)を解釈して、そこからさらに「型」という概念(源了圓『型』を参照)に示されるような行為的認識に関係づけただが、これはきわめて興味深い着眼点であるといえよう。

前期西田を中心にすえた大熊



シンポジウム

氏に対して米山優氏は、後期西田哲学の到達した地点を視野に収めつつ、思想の「文体」を主題化して、示唆に富んだ見解を提示した。米山氏は、西田の、ときに「エッセイ」的と評されるスタイルが独特の力と美をもつのはなぜかと問いかけ、それを後期の「創造的モナドロジー」の思想との連関において考察する。いいかえると、米山氏の問いは「哲学がいかに美となるか」ということであり、思惟の躍動、思惟の生命と解された美がどこから生まれるかということである。この意味で思想の文体はひとつの芸術とみなされるが、このとき芸術は、単なる身体性(生物的生命)を超えた表現にいたらねばならない。西田の場合、単なる身体性を超えてヌーアに到達しうる特権をそなえた芸術は詩であるが、それに対し

て米山氏はむしろ散文をとりあげる。つまり美をそなえた散文とは、語という個物が相互作用において作りだす一種の「社会」であり、文字や音声という物質性を身体としつつ論理(帰納法的論理)を形成し、読者のうちに新たな思考を切りひらく働きにはかならない。この点にこそ後期西田哲学の創造的モナドロジーの思想、つまり個と全体との相互的・循環的ダイナミズムを可能にする思想が見いだされるのである。そして世界を映す個物は同時に世界形成的であり、そのように表現的に自己形成する歴史的世界のあり方が西田の思考スタイルそのものとして映しだされているともいえよう。

最後になるが、香西克彦氏の提題は、建築理論の観点から西田哲学を見つめるというきわめて刺激的なものであった。香西氏は、哲学と建築とのかわりを、主として建築の側から考察し、両者のまじわる境界に建築「論」という知的営みを見極めようとする。まずウィトルウィウスにはじまる建築理論の歴史が概観され、原理的なものの探求のみが本来の建築論の名に値するという見解が示される。しかし香西氏の観点はさらに深化し、ちょうど詩人の詩論と同様に、建築の術そのものが論であり、自己への反省であらざるを

えないことが指摘される。この点に、ポイエーシスとしての詩作的制作との一致が示唆され、そこから西田哲学の基本的立論へと接続していくことになる。直接建築に言及することの少なかった西田はしかし、技術と知をめぐる一般的省察において、建築理論へも多くの寄与をなしていることが西田の著作からの引用を通じて示される。香西氏は、たとえば思惟と制作、考えることと作ること、超越極と内在極等々のあいだの矛盾的自己同一的關係のうちに、つまり両者の往還のプロセスのうちに、建築「論」の成立の場所を見いだそうとするのである。

三者の以上のような問題提起ののち、フロアからの質問をうけて議論が展開された。とくに論議が集中したのは、芸術や美的領域の独自性や固有性の問題であった。西田は一面において、フィードラーやカントなどをとりあげて、自律的な美の領域を前提しているようにみえるが、しかし他方でより広く、ポイエーシスを歴史的形成功用とみなして芸術を考えている。つまり西田は、単に抽象的営為とし

ての近代的芸術を想定しているというよりはむしろ、具体的に生きられる身体性の次元で芸術に近づこうとしているように思われる。おそらくこうした見方を可能にした背景には、西田が生い立った土壌において、西欧近代とは異なる伝統が、つまり「文人」の理想像に象徴されるような文化的伝統が、なお生きられていたからではなからうか。

以上のような議論を経て、シンポジウム劈頭にかかげられたふたつの問いに対して(漠然としたかたちであれ)答えをあたえる可能性が垣間見えてきたように感じられた。とりわけ現代文化に対する西田哲学の意義という第二点に関しては、宗教とならんで芸術のもつ潜在的な力のいくつかの側面が(たとえば建築「論」において、あるいは散文の美において、あるいは「型」において)浮き彫りにされたといえよう。つまり個として世界を映しつつ能動的・制作的に歴史形成に参与するプロセスそのものにおいて、芸術という営みがなお謎めいてたち現れることの意味を西田は見透していたといえるのではなからうか。

特別寄稿

北米便り・西田哲学と女性哲学 遊佐道子

海外からの寄稿欄を『西田哲学学会会報』に新しく設けるとい

うことで、執筆を依頼されましたことを光栄に存じます。在米

生活、はや三十五年、東洋思想や東洋宗教を勉強するには、寧ろアメリカなどの「非東洋」(文化的に違っているという意味で)において既成概念にとらわれないで、関心が持ちやすいのではないかという逆説的体験をしてみました。

この数カ月は、「日本女性思想家・哲学者」を「発掘」する使命を与えられ、目下、日本の女性の思想家や彼女たちの背景にある歴史的・社会的環境についてリサーチを行い、考えているところです。この仕事は、南山宗教文化研究所のジェームズ・ハイジック氏が中心となつて進めている『日本哲学資料集』とも言ふべき、海外で哲学を専攻する学生や哲学者向けの英文参考書の編集事業の一環です。

西田幾多郎が、「人生を本として学問せよ」と自分に言い聞かせ、哲学は「人生の悲哀」から出発すると述べているのは、まさしく、近代日本で女性が母性問題や社会的立場について思想的に取り組んだ姿勢そのものです。女性の思索活動は、生活と直結して、女性がおかれた環境、状況を改善し、問題を解決して行く点で、「人生を本として」思索することは、女性にはさして目新しいものでもないかもしれません。

だれでも、哲学するためには、

それを可能にせしめる経済的・社会的・文化的地盤が必要ですが、特に女性に思索の機会や場を提供してきた要素として、「宗教」、「文学」、そして、「教育」の三つが挙げられます。

宗教が日本女性の思索活動に大きく関与したと言うと、首を傾げる人がいるかもしれません。というのも、宗教には、女性を抑圧するエレメントが付きまわっているからです。しかし、その反面、女性の主体性を確立し、精神的自由を与えることも宗教はなしてきたのです。たとえば、道元は『弁道話』で、「仏法を会すること、男女貴賤をえらぶべからず」と述べているし、『正法眼蔵』の「礼拝得髓」にも、禅の修行において「男女を論ずることなかれ。これ仏道極妙の法則なり」と記されています。彼自身が宋で見聞してきた「道を得、法を得たる比丘尼があれは、法を求めてまなぶ比丘たちが、その説法の座につらなつて礼拝し問法するというのが、古来からの仏道をまなぶもののごうれた習いである」という事実が、日本の禅宗の尼僧達にとって、励みとも証ともなりました。

キリスト教的ヒューマニズムは、「男女等しく神の子である」という信念の上に立っています。が、明治時代以降の日本女性間には特に教育を通して、浸透し

ていきました。女子英学塾を創立した津田梅子も、十数年にわたる二度のアメリカ留学生活を通し、更にイギリス滞在中に訪れたフローレンス・ナイティンゲールとの出会いや、キリスト教徒の「博愛」精神にふれ、精神性の普遍性に触発されて、彼女の人生を日本女性の教育にささげる決心をしたのでした。

次に文学活動ですが、それが日本女性の思想表現、展開において担った役割は、女性の自立、解放にとって決定的だったように思えます。「言語表現」としての文学は、創作活動であり、自己理解を必要とし、見聞きした物事が思索を促します。平安時代からの女流文学が誇る歴史的息の長さや文化的意味の深さが、今まで女性が文筆活動をする際に、ある「尊厳」を与えてきたとも考えられるでしょう。与謝野晶子や平塚らいてうのような活動家は文筆活動を通して女性解放運動へ働きかけました。

明治維新直後に、積極的に欧米文化や自己確立の伝統を摂取しようとした政府の要人も、明治末までには保守化し、女性の教育は「良妻賢母」型にはまってしまうました。それは、男女間に極端な知的ギャップを生じさせしめ、女性は人格としてよりも、「家制度」下で男性の「付属品」と化してしまいました。福沢諭吉や新渡戸稲造などは、女子教育の必要性

を説き、女性の地位向上のため、「新女大学」や「女大学評論」、また『婦人に勧めて』などを世に問うたのです。

西田幾多郎は長女の弥生(一八九六年生まれ)に期待をかけ、幼稚園時代にはアルファベットを教え、小学校の四、五年ごろには『日本外史』、『竹取物語』、『古今集』などを読ませ、早期教育を施しました。弥生は一九一三年(十七歳)から一九一七年(二十歳)まで東京女子高等師範学校(今の御茶ノ水大学)に通いましたが、卒業をひかえて、西田は「学問で身をたてるか、それとも結婚するか」と問うたようです。それに答えて、弥生は「私はもちろん生涯を女学者で通す自信はないし、それに下田次郎博士の心理学か何かの御講義に聞いた御言葉が動機になって、何か仕事を持って世の中の為になるよりも母親としてよい子孫を次代に残すことが女人としてうまれて最も意義ある仕事であると確信して」いたので、結婚を選ぶことにしました。西田は、弥生の希望を受け入れ、本を読むことをあまり奨めなくなったということです。しかし、このやりとりから、自分の娘が「学問で身を立てる」ことを西田は選択肢として考えていたことが伺えます。「良妻賢母」型の国家主義

的

的教育を西田は内心どう思っていたのでしょうか。実に興味のあふ点です。

「学問で身を立てる」ことを目指したのは、西田の姪の高橋文(一九〇一年生まれ)でした。文はドイツへも留学し、伯父西田の論文二本を独訳し、論文もいくつが発表し、これからの活躍が期待されていた矢先に、四十三歳の若さで戦争末期の一九四五年六月に早世してしまいました。彼女の足跡に関しては、浅見洋氏によって「未完の哲学者、高橋文」の資料集その他が編まれています。

戦後六十余年、今日の私達は、性、文化、国籍を越えて、思想的に活躍する場が与えられるようになりました。目下私が担当している仕事を通して、過去から現代までの日本女性の思索の歴史が掘り起こされ、今まで注目を浴びなかった数々の女性が、彼女らの実生活を通し思索に従事し生活環境改善を図った事実新しい光が投げかけられることを喜びとします。

ところで、文末になりましたが、最近の海外での西田哲学研究の実態について少し触れておきます。過去二、三十年来、行われてきた短絡的な政治的思惑や俗評を離れて、もう一度、西田哲学自体に戻ろうとする動きが北米及びヨーロッパの若い研究

家の間に見られるようになりました。また、日本の思想を西田哲学や京都学派の哲学に限らず、広く大きく、多層的に捉えようとする動きも出てきています。これらの若い学者を養成する先生方のご努力と、若き学者達の活躍のおかげで、日本の哲学への興味は、これから更に深まるうとしていきます。これからの一つの課題は、世界各地の大学に日本哲学思想のコースがどれだ

**国際化を目指す  
外国語セッション**

林 永強

香港教育大学院  
宗教教育及びスピリチュ  
アルティ教育センター

西田哲学会第六回年次大会では、新たな試みとして、初日の朝、外国語セッションを行った。今日までの海外報告という枠と異なり、一つのテーマに絞って、外国語で発表するパネルであった。

今回は三人の研究者からの提案により、「西田哲学と新儒教」というテーマのもとで、それぞれの課題や観点から英語で議論された。西田哲学会会長でおられる大橋良介先生のご依頼により、元明星大学教授でおられるワゴ先生に司会者を務めていただいた。初めての試みであり、どれだけの方々が出席くださるのかとワゴ先生や三人の発表者と共に、会場である西田幾多郎記念哲学館に向かうシャトルバスに乗りながら、心配の声が出た。しかし予想

け増設されるか、そうしてもう一つの課題は、分析哲学に偏っている西洋の学会で、日本哲学をも含めて非西洋思想がどれだけメイン・ストリームにうけられるか、でしょう。このような新しいよき傾向が見えることと、努力を惜しんではいけないチャレンジが前途に横たわっている事実を指摘させていただいて、北米便りいたします。  
(二〇〇八年九月三日)

外に多くの参加者があった。

さて、なぜ今回の外国語セッションを提案したのか。また、なぜ「西田哲学と新儒教」としたのか。それらは西田哲学研究の現状と、西田哲学会の発展と関連する。まず、今日までの西田哲学研究においては、西洋哲学との比較研究は数多くあり、高質であるが、東アジアにおけるそれぞれの哲学的伝統との比較研究は極めて少ない。それに対して、中国哲学、特に「京都学派」とほぼ同じ時代である「新儒教」の哲学と西田哲学とを比較し、それらはどのように、西洋哲学を受容、また対決しながら、それぞれの「哲学的」対話を通して、「哲学」を創造し、転化したかという可能性とその問題性を究明してみたいと考えた。次に、西田哲学をはじめとする「京都学派」は、「世界哲学のフォーラム」の一環と指摘され、その「世界」は、西洋、日本に限らず、少なくとも他の東アジアの「哲学的伝統」に向かわなければならぬのである。西田哲学と中国哲学との比較

を通し、西田哲学はどのようなポテンシャルがあるのかを考察しておきたい。また、西田哲学会では海外報告という枠を設けているの場を絞りパネルという形で検討する場はない。従って、西田哲学会で、「国際化」に向け、世界からの研究者を集め、日本語のみならず、外国語での議論の場を設けてはどうかと私は考える。今回は西田哲学と中国哲学との比較というテーマを通し、一人のみならず、ほぼ同じ言語、文化、哲学的関心を抱く三人の研究者により、論文を通して議論するだけでなく、日本の研究者と中国語圏の研究者との直接的な交流を念頭に行った。なぜならそれには、人と人とのふれあいのみならず、哲学生活という願いがこめられていたのである。

「西田哲学と新儒教」というテーマにより、香港中文大学哲学部の張政遠氏、台湾国立清華大学哲学研究所の黃文宏氏、また香港教育大学院宗教教育及びスピリチュアルティ教育センターの私により発表した。外国語セッションは、今後も行う予定である。それと同時に、西田哲学や西田哲学会の国際化を目指すのであれば、年次大会プログラムの多様化、年報出版や配布を活性化してはどうか。例えば、学会のサイトに論文の要旨を掲載、大学の図書館に寄付、他の学会誌、学術的雑誌との交換をも考えられる。また、二〇一二年には、西田哲学会の十周年を迎えるにあたり、国際的シンポジウムを行い、発表論文を集約し、一つの本という形で出版してはどうか。それらを通して更なる発展を遂げ、西田哲学研究をより一層飛躍させるのではないかと私は考える。

**エッセイ**

私にとって、

西田幾多郎とは誰か

呉 光輝

「北陸の小京都」と言われる金沢を散歩し、再び宇ノ島の地を踏んだのは、十五年ぶりの二〇〇八年七月二十六日に行われた西田哲学会の時であった。ぴかぴか輝いている西田記念館を遥かに望み、我が心の憧れている「聖地」へ向かっていく私であった。

元々近江の聖人、陽明学の祖である中江藤樹に興味を持っていた私が、西田哲学の研究を行ったのは、思いがけない「縁」であった。かつて陽明学の精神に動かされた西田幾多郎が、そこから何を受け継いだか、といった無心の問いから、西田哲学と陽明学の比較研究という課題を、尾藤正英教授のお勧めで遂行していった。それで、青年期の「不羈」の性格に駆使された私は、西田哲学と一つの「縁」を結んだのである。ただその時、この課題の「任重くして、道遠し」とは、全く知らなかった。私にとって、西田幾多郎の「魅力」は、いったいどこにあるのか。まず、「悲哀」や「孤独」を遍歴した西田幾多郎の人生であった。「我が心深き底あり喜びも憂の波もとどかじと思ふ」、「哲学の動機は、『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならぬ」というように、一連の人生の「悲哀」や「孤独」に屈せず、それを「活用」し、哲学をすすめる深い「動機」と看做している西田幾多郎の人生像である。西洋文学者 Harold Bloom は、かつて『The Western

Canon』(一九九四年)において、自己の「孤独」を「活用」するのは、西洋古典の全ての意義である、と強調したが、西田幾多郎はまさに、このような西洋古典の「意義」を身につけ、哲学をしたものではないかと思われる。

西田幾多郎は畢竟、東洋の一人本人であった。しかし、西田幾多郎は決して、沈黙の他者、自分の歴史を語れない「東洋」の日本人ではない、むしろ自ら「語り手」の自覚を持ち、語る「権利」を主張している。西田幾多郎はかつて、「我等東洋人の哲学は、必ず我等の生命の表現でなければならぬ。幾千年來我等の祖先を孕み来った東洋文化の発揚でなければならぬ」と、「善の研究」中国語版の序言に述べている。西洋を源とする哲学の「普遍性」を問いつつ、どこまでも独自性を主張するのは、西田哲学の根本的な性格である。今の我々は、「語り手」として活躍しているように見えるが、「語る」「言葉」でさえ我々固有のものではなくなり、真の「語る」権利は、いかにして守られるのであるのか。そこから、西田哲学は、今悩んでいる我々に新しい「光」を与えてくれるように思われる。西田哲学に「魅力」を覚えたのは、西田哲学を中国に紹介したい気持ちがあったからだ。一中国人として日本の哲学を勉強する「自覚」は、最初から持っているものではなく、むしろ「儒教」の中国から来たものか、「西田幾多郎って？」といった刺激から考えさせられたのである。しかし他方、「善の研究」は二度も中国語に翻訳され、出版されたが、仏教思想と相違なし・資本主義の哲学・「独特」

な哲学といった言葉から、西田哲学の真相を必ずしも明らかにしたものでないという「遺憾」の念でいっぱいであった。だから、真の自己とは何か、場所とは何か、情的文化とは何か、西田哲学を勉強しつつ、それを媒介にして、日本人の心を理解すると共に、さらに、いかに「哲学」をするか、という問題を考えていきたいのは、今の私である。

もしも、師がデカルトだったら  
兄玉明德

私は化学メーカー出身で、計算力学を専門としてきました。自然科学系の計算シミュレーションは、計算科学(ミクロ系・原子分子構造の世界)と計算力学(マクロ系・連続体の世界)に分かれます。つまり、理学と工学の違いといっているいかもしれませんが、徐々に境界が工学から理学へと拡張されつつあります。さて、私がどうして西田哲学に取り組み始めたか、お話しします。先ず西田幾多郎の始まりと比較してみると、分かりやすいかと思われれます。西田は四高時代、専門を決めるときに「数学」か「哲学」か決めかねていた。恩師、北条時敬(専門・数学)に相談すると、「哲学」は論理力・想像力など特殊な能力が必要で、それが西田に備わっているか分からないから、無難な「数学」にするよう諭された。しかし、西田は「哲学」の素質があるか分からないが、無味乾燥な「数学」に生涯を賭ける気になれなかったので、「哲学」に決めてしまったことはご存知と思います。

私にとっては、西田幾多郎はただの哲学者ではなく、だんだん目の前にはっきりと現われていく西田記念館のように、一つの「山」である。その山への道を急いで歩いている私は、多少の曲折迂回を経験し、いつそこにとどり着き、山の全景を一覧することが出来るのか、私にはわからないけれど、ただ今は、その途上にあることだけ分かっている。

私にどうかというところ、

「数学」かという悩み方はせず、むしろ北条のように慎重で無難な解答を出したといえ、少し大袈裟かもしれませんが、西田とは逆の「数学(工学における数学、すなわち計算力学)」に決めました。ここで、「数学」は、工学の手段という意味づけがなされ、西田のいう無味乾燥な「数学」とは異なります。計算力学では、現象を微分方程式で記述して、対象を離散的场所(飛び飛びの、対象を代表する位置・座標)で置換え、収束性を考慮した上で、制約条件・初期条件をつけて、それを解きます。ほとんどは厳密解でなく、近似解ですが、「数学」であることには変わりはありません。また、つけ加えて、工学とは何かといえますと、目的を明確に定義して、客観的手段(計算力学では数学)を使って解を出すことです。つまり、実用主義・プラグマティズムです。私は、このような方法に共感したのです。ただ、現在では目的の正統性を主張できるような「倫理」の検討に重点がおかれていることも事実であり、「倫理」を通じて「哲学」に直結していること

になります。ですから、後から考えること、「数学」でもあり「哲学」でもありとなってしまう。以上長くなりましたが、私の出発点は「数学」でした。

化学メーカーに入社してから、近代合理主義の祖であるデカルトを自認する。師に出会い、結果として「哲学」に深入りすることになります。私は、そうして師と一対一で、デカルトの著作で最も基本中の基本である『方法序説』の読書会を始めることになりました。これから生涯、計算力学にたずさわるのである者にとって、『方法序説』を読むことは、どんな価値があるのだろうか。読んでみて愕然としました。それが、新たな真理を発見するための方法の書であり、ユークリッド幾何学に基づく一方で非常に簡素な四つの規則からなるものだったにもかかわらず、先人が一般に明らかにしてこなかったことでした。すこし内容に沿っていくと、第一・明晰判明な原理に到達する、第二・分析対象を理解できるところまで、あるいは問題を解ける部分まで小さく分割する、第三・総合原理から出発し部分を組み立て体系化する、第四・全体を見て、見落としがないか確認する。このような規則は、すべて計算力学においては実行してきたことに気づかされ、デカルトの視点が今も生きていることを、師は伝えたかったのだと感じさせられました。これが私にとっての哲学の始まりでした。

化学メーカーに入社してから、

やがて、計算力学のこれまでのアプローチでは限界があることに気づきます。これまでのアプローチは、対象領域で起こる現象に対して支配方程式(微分方程式)が

決定している必要があり、決まっていなければ解けません。これをトップダウン・アプローチということにする。これに対して対象領域を、計算精度の十分保証する部分(要素あるいはセル)に分割して、近傍のセル同士の相互作用(局所近傍則)によって、セル上の状態量を決める。これをボトムアップ・アプローチ(一般には、創発つまり、人工生命の中心概念)部分間の局所的な相互作用の結果、全体が現れ、それによって新たな秩序が形成される現象」とする。この二つのアプローチは、西田

決定している必要があり、決ま

総会・理事会報告

日時 平成二十年七月二十七日  
(日) 午後一時四十五分～  
午後二時

場所 石川県西田幾多郎記念哲学館地下ホール

一、会計報告

事務局の大熊理事より二〇〇七年度会計報告と二〇〇八年度予算報告があり、ともに承認された。

二、規約改正について

引きつづいて大熊理事より規約改正の提案があり、承認された。今回の改正の要点は、規約に次の三つの条項を加えるというものであった。

第七條として「会員は、退会を希望する場合には、当該年度までの会費を納入し、随時退会することが出来る。」

第八條として「三年以上会費未納の会員は、自動的に除籍とする。」

第十五條として「会計年度は、四月一日から翌年三月三十一日までとする。」

の「デカルトの哲学について」で、次のように述べられている。一哲学は我々の自己の自己矛盾性から

出立するのである。疑そのものが問題となるのである。私は我々の自己の自己矛盾性から相反する二つの方向に行くことができると思

う。一つは自己肯定であり、一つは自己否定である。一前者が西洋文化・論理・トップダウンアプローチ、後者が東洋文化・体験・ボトムアップアプローチである。このことは、心身合一・心身一如へと

駆りたてる。(今わたしはメーカーにいません。以上試論ということ

でお許しください)

三、「年報」について  
編集委員会の岡田理事より、今後の『年報』については英語での論文応募を認めてはどうかという提案がなされ、承認された。

四、来年度の行事について  
来年度は三年に一度の役員選挙の実施年に当たること、来年度の大会は平成二十一年七月二十五日(土)、二十六日(日)に京都大学文学部で開催されることが報告された。

理事会  
西田哲学会第六回年次大会の開催に合わせ、七月二十六日、西田幾多郎記念哲学館にて理事会が行われた。出席理事は十四名、委任状二通、さらに幹事会補佐三名の参加があった。議題・報告事項は以下の通りである。

一、来年度大会について  
総会報告の通り。なおプログラムについては、秋の理事会で検討する。

二、役員選挙について  
来年度が三年に一度の役員選挙の実施年に当たることから、前回の選挙時の資料が提示され、前回に準じ

て実施することが承認された。なお、選挙時に配布するB・C会員リストの現理事に印を付けること、学会の国際化のため、海外在住理事を指名枠(現行規約第九条)で若干名委嘱することが承認された。

三、編集委員会報告

外国語セッションについて今後も積極的に推進してゆくこととの合意のもと、今回の発表の報告を『会報』に掲載することが確認された。なお、『年報』掲載については、他の応募論文と同様に扱う(査読を必要とする)が、英語での応募も認めることが承認された。

今後の論点として、英語以外での発表をどうするか、レジメの日本語訳(抄訳)や議論の通訳などをどうするか、などが挙げられた。

四、会計報告

総会報告の通り。

五、規約の改正について

総会報告の通り。

六、その他

秋の理事会を京都で開催し、次回大会のプログラムや上記の課題について議論することが承認された。

**西田哲学研究会の「案内」**

**西田哲学と私 波田野和代**

私が東京の「西田哲学研究会」に席をおいてもう七年余りになる。初めは何も分からず、とんちんかんな受け答えをしていたが、最近、少しずつ西田哲学の根底にあるものが分かってきたような気がする。この会のメンバーは二十代〜七十代で、学生から大学の先生、主婦とさまざまである。研究会は輪読が中心で、『善の研究』から始まって、最近では「自覚について」など難解なものも取り組んでいる。雰囲気はリラックスし

た中にも質疑応答が飛び交う。三時間余の読書会後は懇親会となる。本当はこの懇親会の方が楽しみ、という声もある。難解な西田哲学の勉強中は難しい顔をしている人も、懇親会では優しいおじさん(?)に変貌する。この場所では、新しく参加された人とも、すぐ仲良しになれ、次回からの参加が更に楽しみになる。私にとって西田哲学は、依然として難解であることに変わりはないが、石の上にも三年(七年?)、一步一步理解を深めて行くことができた、と思っている。

**西田哲学研究会の魅力**

峰村鉄男

信州の田舎で教師をやっておりました私が、京都で開催される西田哲学研究会に参加させて頂けたのは、辻村公一先生や上田閑照先生等とのご縁・ご恩によるものです。この会にお世話になってから、断続的ではありますが、二十年以上が経ちます。

この会は、不思議な魅力を湛えた会だと思えます。哲学研究会ですから、当然のことながら哲学の研究をするわけですが、その構成員は西田哲学専門の研究者だけではないということ。心理学者や教育学者や、時には、外国からの留学生等も参加しています。このことは一体何を示しているのだろうか、と考えることがあります。

西田哲学に関心をよせ、その研究を各自の専門領域での研究や活動に生かす、という点では共通していると、西田哲学は哲学を超えた幅の広さ・深さをもっていること

連絡先 西田哲学研究会事務局  
nishidaphi@mx9.ttcn.ne.jp

が改めて確信できます。「経験・自覚・場所」等という西田哲学の独自の核心と論じられている領域の広さとが、我々が直面している諸課題の解決に糸口を与えてくれるのではないかと期待となり、魅力になっていくと感じられます。

この哲学と深い関係にあるのが、禅ということですが、哲学研究会において禅が直接に語られることはありません。不即不離の関係にあるようにみえながら、語ってしまえば両者に死ぬかも知れない、という困難さ・微妙さも魅力の一つのように思います。説明の哲学と体現の禅とを一つの場におき、現今の課題に即して探究するという絶えざる創造的挑戦は、多くの参加者にとって醍醐味であり大いなる魅力であると思われまます。有縁の方々感謝し、今後ともできる限り参加させて頂きたいと念じております。

連絡先 築山修道先生  
TEL 〇七四八(八八)七五〇九

**「求真会」の案内**

「求真会」は、西田哲学を批判的に継承して独自の哲学を打ち立てた京都学派の哲学者・田辺元を記念して、昭和五十二年に設立された会で、会の名称は、記念碑に刻まれた田辺の言葉「私の希求するところは真実の外にはない」に由来します。田辺が晩年を過ごした北軽井沢の別荘には、田辺記念館および記念碑と並んで、群馬大学北軽井沢研究所が建てられています。本会では毎年八月末、同所において、記念碑への参拝、記念館の見学とともに研究発表会を開催しています。本年度より事務局が筑波大学の伊藤益教授のもとに移されたのを機会として、会員および研究発表会への参加者を広く募

集することになりました。寄付金をいただいた会員には、会誌『求真』をお送りします。研究者・社会人を問わず、西田・田辺哲学あるいは哲学・日本思想に関心をもつ方に多数ご参加いただき、議論の場が広がってゆくことを希望します。

事務局連絡先:  
〒三〇五-八五七-一 茨城県つくば市天王台一-一 筑波大学人文社会科学研究所 哲学・思想専攻 伊藤益研究室内  
電話:〇二九-八五三-四一八四  
KyushikiKa001@yahoo.co.jp  
西田哲学会内連絡係:  
杉本耕一 sgnt\_k@hotmail.com

**「西田哲学研究基金」について**

昨二〇〇七年度、第二回の西田哲学研究基金公募には七名の応募があり、厳正審査の結果、以下、先の二名にそれぞれ五〇万円、後の二名にそれぞれ三〇万円を交付しました。

林永強氏(香港教育大学院准教授)、研究計画:「生命の学問としての哲学」西田幾多郎と牟宗三・エンリコ・フォンガロ氏(南山宗教文化研究所非常勤研究員)、研究計画:「西田哲学における『時間』について」

熊谷征一郎氏(大阪大学非常勤講師)、研究計画:「場所」の成立と展開」

石井砂母亜氏(上智大学大学院

博士後期課程在学中)、研究計画:「西田哲学とキリスト教」『無の自覚的限定』における実在論からの展開」

今年二〇〇八年度の交付基金を公募します。一件につき三〇万円から五〇万円、数件の採択を予定しています。応募要領は次の通りです。

(i) 提出書類:  
① 履歴書 ② 研究計画

(ii) 提出先:  
〒六〇六-八五〇-一 京都市左京区吉田本町 京都大学文学研究科 氣多雅子研究室

(iii) 締切り:  
二〇〇九年四月四日(土)必着

(iv) 備考:二年以内に、研究成果報告を提出していただくことになっていきます。報告形態は、刊行物のコピー、抜刷り、あるいは四千字程度の報告文書とし、提出先は上記の氣多研究室とします。

西田哲学研究基金運営委員会  
二〇〇八年度代表 氣多雅子

**『西田哲学会年報』掲載論文の公募について**

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんのお募をお待ちしています。

なお次号第六号掲載分は、二〇〇九年一月末をもって締め切りとさせていただきます。なお『年報』巻末の応募要領をご参照ください。

**編集後記**

第六号も皆様のご協力によって、心に響く充実した内容のものにしていただけたと、心から感謝しています。ただ紙面が限られておりますので、いた

だいた原稿の一部を私のほうで削減調整いたしました。ご寛恕ください。

毎号一步の工夫、心をかけてまいりました。日々の生活もそうありたいと願っています。

(編集委員長 岡田勝明)